

命をかけて、頼りにします

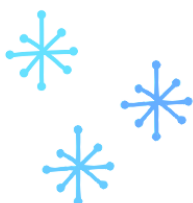
私たち人間は誕生と同時に、まず親を頼りに生き始めます。
やがて成長しながら先生を頼り、友達を頼り、やがては結婚し、
頼るだけでは無く守るべきものも増えていきます。
私たちは大人に近づくに連れて、頼る側から頼られる側に少しずつ変化していきます。
人が大人になるということは、頼られる人材になってきたということなのかもしれませんし
もしかすると反対に、頼られることで成長していくのかもしれない。

家庭の奥さんは旦那さんに「頼りにしてるわよ。」と言い
職場の上司は「頼りにしてるぞ、頑張れ！」と励まします。
この「頼りにしてる」と言う言葉は、現代社会の中でも良く耳にする言葉なのですが
その頼りの度合いについては実はまちまちなのです。
人が人を頼るとき、実際にはどのくらい頼っているのでしょうか？



犬が飼い主を頼るときには、実は命をかけて頼っています。
犬はいったんこの人と暮らすと決めれば、もう動揺はしません。
万が一、信頼する飼い主さんが帰ってこなくなったり、その貧しさから食べるものがなくなったとしても
犬はその暮らしを嘆いて、家出をしたり自殺をしようとは思いません。
そればかりか、その暮らしに追い込んだ飼い主さんに対して、怒ったり恨んだりさえないのです。
私たち人間は、どんなに仲の良い夫婦であっても、その価値観がすべて同一ということはありませんが
犬の世界で言う『群れ』とは、共通の価値観を持つことが条件となります。
群れの中では、喜怒哀楽の条件や幸福感も一体なのです。
その一体感は、生死の境よりも優先します。
犬が自分の群れ（家族）として認めた飼い主さんであれば、犬は『命をかけて頼る』のです。
人間同士の関係では、命をかけて頼り続けることは相当な難しさを伴いますし
長い人生の中でも、そんな関係に出会うことはめったにありません。

あなたが『可愛い』と微笑んで、1頭の犬と暮らしはじめた時から
その犬は全身で、命をかけてあなたを頼ってくるのです。
あなたからの食事を待ち続け、あなたとのひとときを楽しみ
あなたの手で触られることを最高の喜びとして、一生を過ごそうとするのです。
もし、あなたが安易に裏切ったり、忘れたり、手抜きをすれば、あなたに命を預けている愛犬は死にます。
しかも、怒ったり恨んだりすることもなく死ぬのです。
私たちは、犬と暮らしはじめると、犬の『命をかけた頼り』からは逃げられません。
心の底から頼られた私たちは、本当の大人に成長していかざるをえないのです。
現代の犬は昔の牧羊犬や猟犬と違い、私たちの仕事の役にはたっていないかもしれませんが。
しかし、『命をかけて頼る』ことで、飼い主である私たちの心を成長させているのかもしれない。
やがて、頼りにされているという生活が私たちの生きがいにもなり
強い心の安定にも繋がっていくのかもしれない。



2021年2月

NPO 法人ワンワンパーティークラブ 三浦 健太 著